

第二編 歷史

第一章 先史・原史時代

第一節 旧石器時代（先土器時代）

一 旧石器時代とはどんな時代（概説）

石器だけの生活

道具を最初に使用した人類は、東アフリカで発見されたアウストラロピテクス（猿人）である。お

よそ二五〇万年前の人類の祖先で、類人猿よりやや大きな脳容量もち、二足歩行をしていたという。その化石とともに発見された道具は円礫えんれきの一部を打ち欠いて作った礫器といわれる粗末な道具であるが、これがただ一つの生活の道具であった。

このあとに続く人類の祖先たちも、石器を生活の用途にしたがってさまざまな形に作り出す技法をみだし、石器文化を作りあげていった。

石を打ち欠いて加工しただけの道具を使うことに特色のあるこの時代を旧石器時代とよんでいる。また、土器がまだ見られないことから先土器時代ともよばれている。最近ではこのような時代は今から約一万二〇〇〇年ほど前まで続いたと推定されるようになった。

旧石器時代の 旧石器時代は人類の歴史の大部分を占めているが、自然と人類 地質学上の時代区分ではその中心は新生代第四紀に

第1表 旧石器時代の時代区分

推定年代	200万	150万	70万				15万	3万	2万	1万年前
地質年代	更新世（法 積 世）									完新世（沖積世）
氷 期	ビーバ 氷 期	ドナウ 氷 期	ギュンツ 氷 期	ミンデル 氷 期	リス 氷 期	フルム氷期				後氷期
						I	II	III	IV	
人 類	猿 人 (アウストラロピテクス)			原 人 (ピテカントロプス シナントロプス)		E 人 (ネアンデルタール)		新 人 現代人 (クロマニヨン)		
時 代 区 分	旧石器時代（先土器時代）									禮 儀 文 代 時 代
							（前期旧石器時代）		後期旧石器時代	

（『太宰府市史』考古資料編より、一部改変）

属している。その中でも今から約一万年ほど前までを更新世（洪積世）、そのあと現在までを完新世（沖積世）とよんでいる。旧石器時代はほぼこの更新世にあたる。

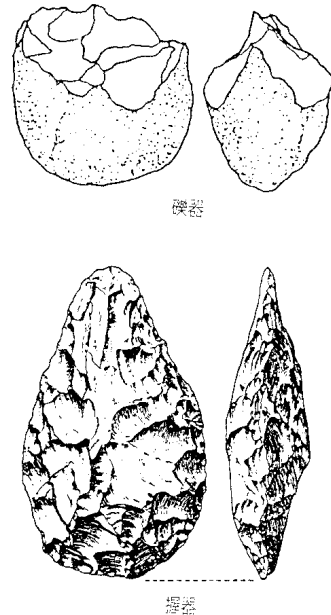
更新世はまた氷河時代ともいわれ、この間には寒冷で乾燥した氷期と温暖な間氷期とが繰り返しておとずれている。人類はゆっくりではあるがきびしい自然の大変動の中で、環境に適応しながら生きのび、着実に現代人へと進化をとげてきた。（第1表参照）

ところで日本列島についてみると、二〇〇万年という更新世の間では火山活動も活発で、また氷期と間氷期には幾度もその姿を変えている。氷期の最盛期には浅い朝鮮海峡・津軽海峡・間宮海峡などは陸橋によって幾度か大陸と陸続きになったが、日本各地で化石が発見されているナウマン象・マンモス象・オオツノジカなどの大型獣類はこのいずれかの時期に大陸から渡ってきたものと考えられている。そして日本人の先祖もこれらの動物を追って日本列島にたどりついたとされている。日本の更新世人類の化石として「明石原人」「葛牛人」「牛川人」「三ヶ日人」「浜北人」「港川人」などが発見されているが、不明な点の多いものもあり、論議をよんでいる。

日本の旧石器時代

昭和二十二年（一九四七）、相沢忠洋氏によって岩宿遺跡（群馬県勢多郡笠懸村岩宿）が発見された。その後の発掘調査によって、日本にも旧石器時代の人類が生活していたことが、明らかになった。これを契機に各地でも数千か所の旧石器時代の遺跡が発見されて、最も古い時代の日本人の生活のようすが明らかにされてきている。

第1図 最初の石器



しかし、日本の旧石器時代の遺跡の大部分は今から約一万年前から約三万年前までの後期旧石器時代とよばれる時代に属するものが多かったが、最近ではそれより古い座散乱木遺跡・馬場壇A遺跡（宮城県）など前期旧石器時代の遺跡も発見されている。

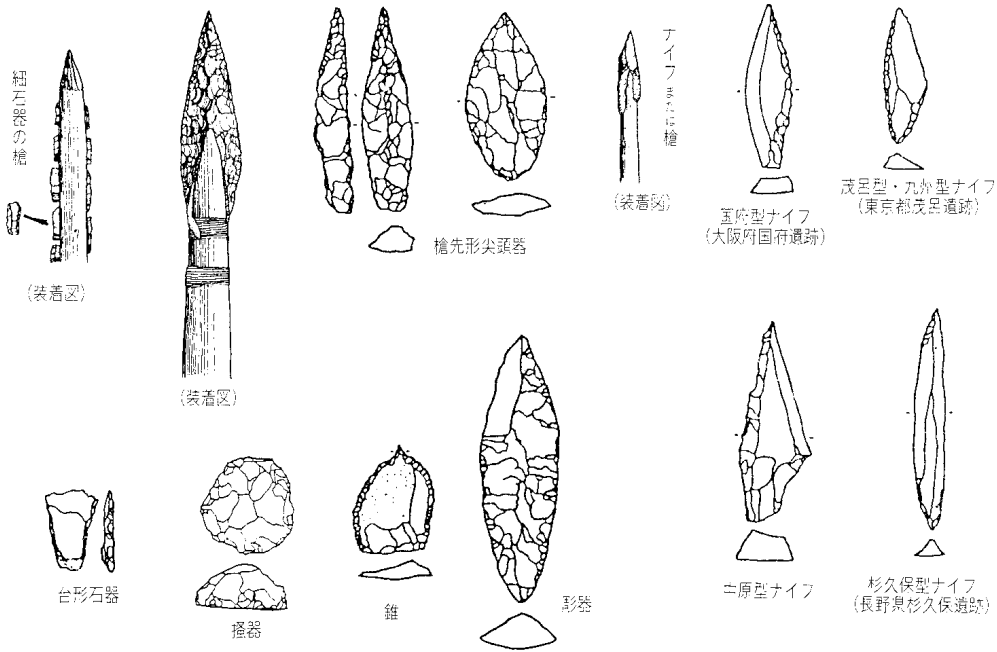
生業と石器の発達

この時代の生業は植物を採集したり狩猟を中心とするものであったが、特に狩猟具を中心とした石器に進歩と時期的な変化が見られる。

最初の石器は礫器で、次には握器へと進歩をみせるが、これらは鋭さよりも力によって動物を殺したり、解体したり、木を切ったりする万能の道具といわれ、人類の歴史のなかで最も長く使用された道具であった。（第1図参照）

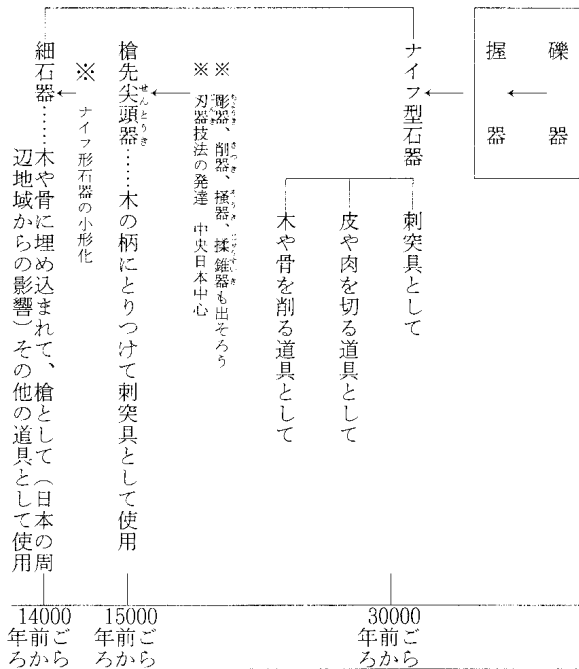
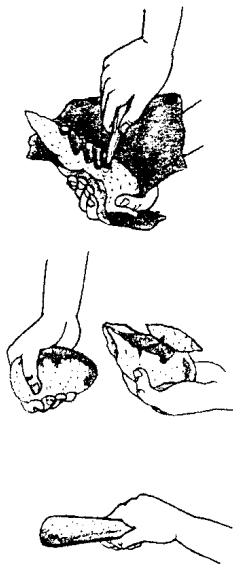
そして後期旧石器時代といわれる今から三万年前以降では、次のような発達の過程を見せる。（第2・3・4図参照）

第2図 旧石器の移り変わり



(『日本の古代』6「縄文・弥生の生活」中央公論社 1986より)

第3図 石器の製作

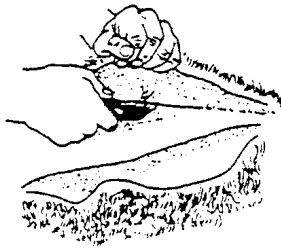


(『日本歴史大系』原始・古代 1991より)

第4図 石器の使い方



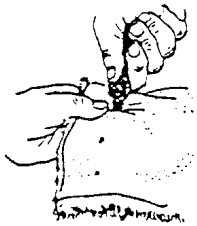
▲エンド・スクレーパー(搔器)で皮をなめす



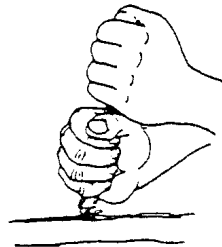
▲ナイフ形石器で動物を解体する



▲チョッピング・ツール(両刃礫器)で木を切る



▲ドリル(錐)で皮に孔をあける



▲彫刻刀形石器で骨に溝を掘る



▲スクレーパーで木をけずる

(『旧石器時代の東北』 1981より)

住まいと集団

旧石器時代のはっきりした住居跡の発見例は極めて少ないが、形態としては、①遺跡面に石器の塊(テロック)や礫群を残すが、住居としては明確でないもの ②地表を浅く掘りくぼめ(堅穴)、柱穴の見られるものなどが報告されているが、②の例として、はさみ遺跡(大阪府藤井寺市)・椎ノ木山遺跡(北九州市若松区)などがあり、これらは約二万年前の住居跡と推定されている。

鈴木忠司氏はこの時代の住居の形態を「地表面に簡単な支柱を配し、上屋を獣皮や植物で覆っただけの軽構造の施設に起居していたことを強く推測させる」としている。また集団などについて稲田孝司氏は「石器ブロックや礫群のありかたなどから数人から十数人の居住を推測し、居住期間は数日から数週間程度でそれほど遠くない場所へひんぱんに移動したであろう」と述べている。

二 身近にある旧石器時代の遺跡

犀川町域からは現在まで旧石器時代の遺跡は発見されていないし、また地表での石器採集などの報告も見当たらない。京築地方全体を眺めてもこの時代の遺跡は極めて少なく、石器などが偶然に採集されて確認された遺跡が多い。また住居跡の出土もないために当時の生活のようすなどは明らかにできない。したがって犀川町と比較的に近い位置にある遺跡について見ることにする。

(一) 富久遺跡(苅田町富久町一丁目)

本遺跡は苅田町役場の北西約五〇メートル、海拔一〇〇〜一二メートルの間に位置